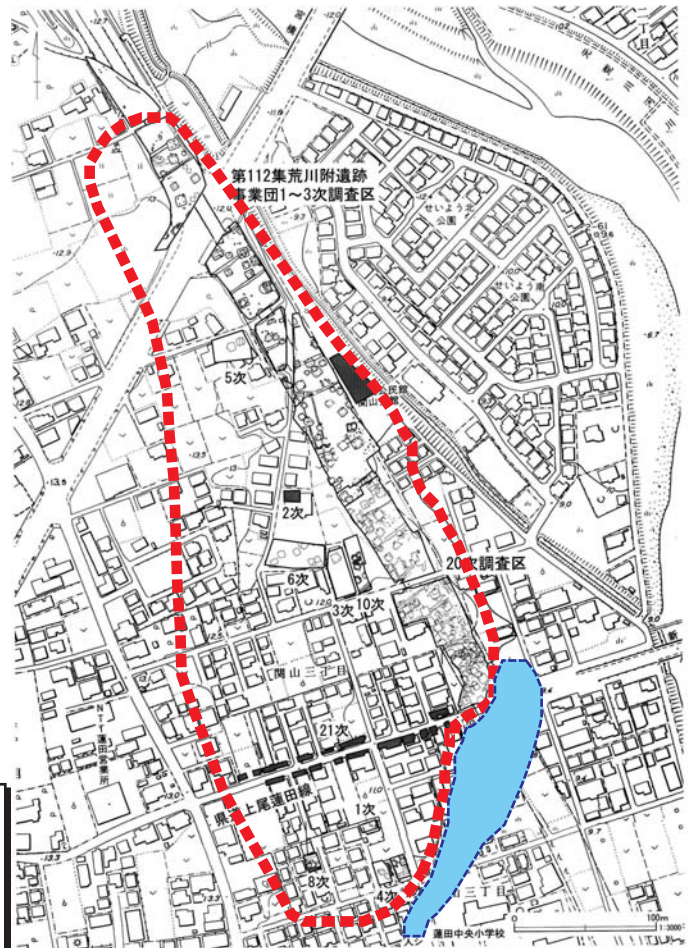


荒川附遺跡 (あらかわづけいせき)

荒川附遺跡は、国道 122 号バイパス関山 3 丁目東交差点北側、関山 3 丁目から 4 丁目に所在します。規模は東西約 200m、南北約 400m、面積約 72,000 m²、隣接する荒川附北遺跡を含めると約 95,000 m²を測ります。南側（関山 3 丁目東交差点付近）は谷に面し、人々の水汲み場になっていたと想像されます。

現在、古墳時代中期の住居跡 12 軒、後期の住居跡 74 軒、奈良時代の住居跡 66 軒（小鍛冶跡 5 基含む）、奈良～平安時代の住居跡 38 軒、平安時代の住居跡 13 軒（小鍛冶跡 1 基含む）、時期不明 66 軒の合計 268 軒、古墳時代以降の土坑約 137 基、奈良時代の土器焼成坑 19 基などが発見されています。また荒川附北遺跡では、縄文時代晩期の住居跡 1 軒、古墳時代後期の住居跡 19 軒、近世の溝跡 4 条などが発見されています。

遺跡から旧石器時代のナイフ型石器も発見され、縄文時代の遺構も発見されていますが、遺跡は古墳時代後期から奈良時代にかけて最盛期を迎えるようです。



荒川附遺跡遠景 (埼玉県教育委員会)

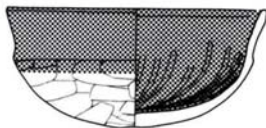
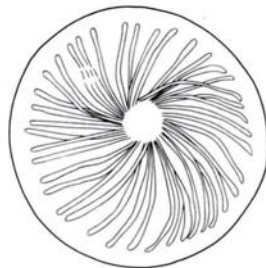
荒川附遺跡のムラ

上記の他にも古墳時代後期の^{たてあなじょういこう} 竪穴状遺構 2 基・円形環状遺構 1 基、近世の溝 52 条・道路跡 1 条、古墳時代後期の住居跡内貝塚 1、奈良～平安時代の住居跡内貝塚 2 などが検出されています。

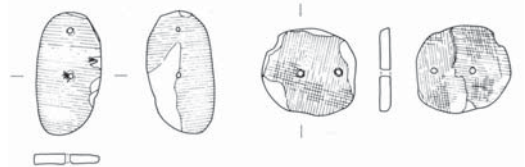
また、古墳時代後期の古墳は遺跡からは発見されてはませんが、北側に隣接する十三塚古墳がこの集落の墓域として利用されていた可能性も考えられます。なお、石製模造品が多数、耳環 4 コが発見されていますが、古墳以外からこれほどの出土例は周辺でも少なく、祭祀との関連も推測されます。

暗紋土器 (あんもんどき)

7 世紀の初頭、都で使われる土師器に、へらのような道具で内面に放射状の磨きを入れた杯が現れます。蓮田でも、7 世紀中頃になると、これとよく似た土師器の杯が作られるようになります。このへら磨きを「暗文(あんもん)」と呼び、金属器のもつ光沢を表現したものと考えられています。こうした土器は、朝鮮半島から伝えられた、銅製の「おわん」形のうつわ、銅鏡をまねて作ったもののようなのです。銅鏡の形をまねしたり、銅鏡に光が当たったときに見える光の線をまねた模様を付けているわけです。



暗紋土器 (あんもんどき)

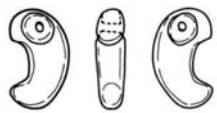


石製模造品：古墳時代後期

古墳時代中期から後期に、碧玉や滑石など軟質の石を材料にして「剣、弓、櫛、鏡、斧」など実際の器物を模造したもので、古墳や祭祀遺跡から出土することが多く、祭祀・儀式用具であったと考えられています。



耳環 (じかん)



勾玉 (まがたま)

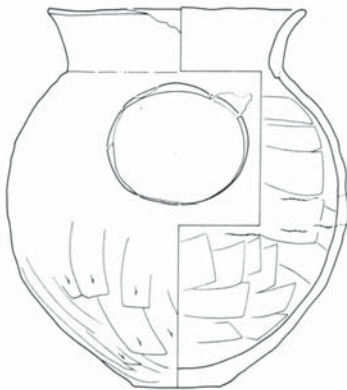
耳環は、今でいうイヤリングです。耳飾りは古く縄文時代から装身具として使われました。縄文時代には土製や石製でしたが、古墳時代になると金や銀・銅などの金属を使い、これに金や銀のメッキを施したものが登場します。

断面形が略円形の金属を丸く曲げたもので、1か所に切れ目を作り、現在のピアスと同じように耳たぶにあけた穴に通して使ったのでしょ

勾玉 (まがたま)

勾玉は縄文時代早期末から前期初頭に滑石のものが出現し、後期から晩期には複雑化し、材質も多様化していきますが、縄文時代を通じて大きさは比較的小さかったようです。

弥生時代以降には、硬玉ヒスイの勾玉が多く製作されるようになり、平安時代には消失するようです。



円窓付土器 (えんそうつきどき)

壺型、甕型の土器の胴部に丸い穴をあけた土器で、なぜ穴が開いているのか意味は分かっていない謎の土器です。分布は愛知県に多く、弥生時代後期に特色づけられます。時代が後になると全国でも散見されます。

この土器の出土例は愛知県以外では非常に少なく、珍しいものです。穴は焼成前に開けられたもので、胴に穴が開いているので壺としては使えなくなってしまいます。

市内では、古墳時代前後の時期にも東海地方からの搬入品が多く、この土器もそれらの1点の可能性もありますが、焼成後に意識的に穴が開けられた土器も出土しており、謎は深まります。

荒川附遺跡の川の津と生産

現在までに、荒川附遺跡では、古墳時代後期から平安時代初めの住居跡が、合計 268 軒発見されています。これだけ多くが発見されている場合には、「郡衛(ぐんが)」などが存在することが多いようですが、この遺跡からは掘立柱の倉庫跡が発見されていないため、その可能性はないようです。集落からは東海・東関東産の土器、外洋産の貝類などが発見されており、元荒川の河川交通の中継点の河岸場として栄えたムラと考えられます。

この他に、荒川附のムラは、元荒川の砂鉄を利用した鍛冶集落、土師器の生産集落としても栄えたムラで、これらも流通の一つとして利用されていたと推定されます。



40号土坑 (土器焼成坑) (埼玉県教育委員会)

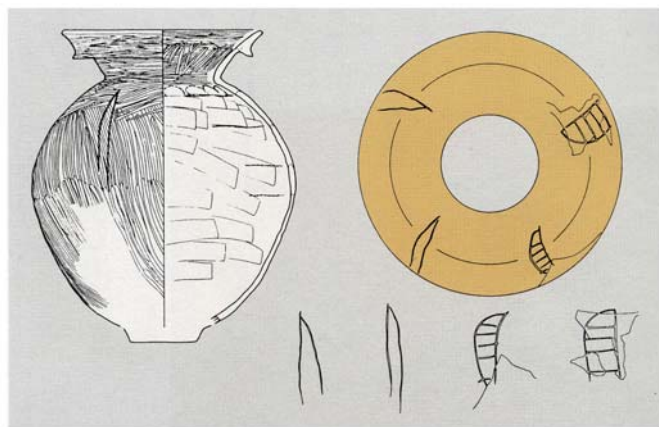
土器焼成坑は、荒川附遺跡が生産も行ってたことを物語の一つで、「土師器」を生産していたと考えられます。周辺では元荒川下流の越谷市大道遺跡(おおみちいせき)でも発見されています。

線刻土器 (せんこくどき) 古墳時代後期

線刻土器は縄文時代にも若干の例がありますが、弥生時代以降増加するようです。縄文人は絵よりも土偶などの立体的な造形を好んだのでしょうか。ただ、「三次元のものを二次元で表現する絵画という手法の方がより高度で難しい」ことなのかもしれません。

絵画土器の分類では、ほぼ半数の 47.3% にシカが描かれており、これに建物 (22.0%)、鳥 (11.8%)、人 (10.2%) を加えると、全体の 9 割を占めますが、縄文時代の重要な食料であるイノシシはわずか 0.5% であり、山や川といった自然を描いたものは一切ありません。また、描かれている建物も高床式倉庫や楼閣といった特殊な建物で、一般的な竪穴住居はほとんど例がないようです。

皆さんは、ここに描かれているものは、何だと思えますか? ご意見をお寄せください。



この土器に刻まれているものは、2種類の絵と考えられます。「矢がない弓」と「盾」という見かたもあります。

【引用参考文献】

埼玉県埋蔵文化財事業団報告書第 112 集 荒川附遺跡
埼玉県埋蔵文化財事業団報告書第 338 集 荒川附遺跡 II